



メッセージ題 「わたしの愛する子」

聖書：マルコによる福音書 第1章9～11節

牧師：秋山 義也

・ 荒れ野に来られるイエス (9節)

「悔い改め」のバプテスマを荒れ野で人々に勧め、ヨルダン川で授けていたヨハネがいました。彼は、救い主が来られることを待っていました。そして、その人を自分は指し示す、その人が栄えることが自分の働きなのだということを宣べ伝えていました。荒れ野。先週、私たちはそこがどのようなところかを学びました。日ごとの糧を、なんとか得る事のできる場所。衣・食・住に困る場所。いのちが裸にされ、危険を感じる場所。わたしたちの人生において、この「荒れ野」の体験があることを、独り放りだされるような出来事があることを、先週、私たちは聖書から聴きました。しかし、それこそが「神の子イエス・キリストの福音の初め」(1:1)に相応しい始まりの場所だったのです。自分のいのちが脅かされる出来事。生きることに困ることがある荒れ野。そこに私たちの救い主イエスは来てくださるのです。何の痛みも苦しみもない世界に手をとって導いてくれるのではなく、私たちの苦しみや悩みを思う、眠れないような夜を過ごす、正にそのようなところに私たちのいのちを覚え、主イエスは私たちに出会いに来て下さるのです。

・ 主イエスは、ヨハネからバプテスマを受けられました。

「バプテスマ」は、「バプティズー」という言葉が使われています。これは「洗う」という意味があるのではありません。罪が綺麗になくなるのではないのです。そうではなく、罪びとが沈められる、という意味があります。沈められると人は死にます。バプテスマはこれまでの古い自分の死の象徴なのです。新しい生のための死です。主イエスは、そのバプテスマをヨルダン川で受けられました。

ここで私たちに、ある問いが与えられます。主イエスは神の子で、救い主である。罪を犯さなかったのです。罪人を赦してくださるその方が、なぜ、わざわざ「罪人の死」の象徴である、バプテスマを受けられたのでしょうか。ヨハネは、「わたしは水であなたたちにバプテスマを授けたが、その方は聖霊でバプテスマをお授けになる。」(1:8)と主イエスを言い表しました。また、自分はその方の履物のひもを解く値打ちもない者なのだ、とも語りました。(1:7)。他の福音書では、ヨハネの方から主イエスに対して、「私のような者が、あなたに授けるなんてできない」と言います。しかし、主イエスはヨハネからバプテスマを授かりました。神の子が人によって、罪なき者のはずが罪人の死を経験したのです。

私はこの主イエスのバプテスマから、1つの聖書箇所を思い起こします。

それはフィリピの信徒への手紙 第2章6～11節「キリスト賛歌」と呼ばれる御言葉です。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」(6～8節まで)

主イエスは、神のところから、私たち生ける者の世へと送られた神の子です。神と等しい者です。しかし、彼イエスは、「オレは神の子だぞ」と、人々の間でふんぞり返って生きたのではないのです。自分のことを、無にして、僕の身分となる。神の子だけれど、人の、いのちあるものの、僕となり、私たちに仕える者となってくださったのです。誰かに強いられてではなく、まったくの自由な思いで、100%愛の思いで、そうされたのです。人間と同じ者となられたのです。人間の姿でこの世に来られたこと、食べなくては生きられない。血や汗を流す。私たちと変わらないのです。そして、へりくだり、十字架の死に至るまで従順でした。人であることに最期までこだわったのです。人に仕えること、愛し抜くことに従順であったのです。僕となられる神。それが主イエスであるのです。

ヨルダン川におけるバプテスマは、「罪人の死」の象徴であると共に、川の底に立つ、という意味で、「一番低い所に置かれる」そういった生き方の証しとして捉える解釈があります。キリスト賛歌にある「へりくだって」の言葉が響き渡ります。一番低いところから、この世に生きるいのちを。その叫びを聴いてくださる。いのちを見つめてくださる。そして関わってくださる。それが主イエスのバプテスマです。バプテスマを受けることによって、主イエスは、罪人と共に在り続けることを、証ししてくださったのです。十字架の死に至るまで。沢山の重荷がある。生きづらさがあるわたしのことを、低みに立ち、分かってくださり、そしてわたしがあなたに代わるよ、わたしが共に負うよと言ってくださる。それがこのバプテスマなのです。それは主イエスの名によるバプテスマを受ける時、私たちもまた、世の思い煩いや苦しみ、痛みの出来事に対して、低みの立つ視点が与えられていきます。世の呻きに対して、敏感な者とされていきます。これまでの自分は死に、新しい主イエスと共なるイキイキとした生が待っているのです。

・鳩のような“霊”が降る

バプテスマを受けて水の中から上がると主イエスは天が裂けるのを、また鳩のような“霊”が自分に降ってくるのをご覧になりました。天が裂ける。主イエスの十字架に至るまで、天の父がその道を見守ることを意味しています。そして鳩のような“霊”が彼に臨みます。

「鳩」。私は「ノアの箱舟（創世記7－8章）」を思い起こします。大雨が地に降りかかり、洪水によって大地が満たされ、しばらくしてそれが収まったけれども、ノアの一族は他のいのちある者たちと、舟をおりてよいか、迷っていました。その時に、鳩が用いられたのです。（創世記8：8～12）つまり鳩は、大地が渴いたことを告げる動物と言えます。「いのちある者よ、ここに生きてよいのだ！」と告げる使いです。ここで生きてよい。大丈夫！という神の音信を告げる。イエス・キリストに臨む、鳩の霊もまた、「あなたはここで生きてよい、大丈夫！」と告げるのです。そしてそれは、私たちにとって救いの応答として受けるバプテスマ、聖霊の名によるバプテスマにおいてもまた、「あなたはここで生きてよい！大丈夫！」と私たちは宣言を受けるのです。

聖書の中に、「鳩」は供え物として出てくることも象徴的ですが、主イエスは「鳩」をたとえて、弟子たちにこのように語りました。（マタイによる福音書第10章16節）

「わたしはあなたがたを遣わす。それは狼の群れに羊を送りこむようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。」鳩。それは、素直さを象徴する動物。その霊を受けるといふことは、私たちもまた素直な者とされる。これは自然体でいい、とも言えると思います。

バプテスマのヨハネの「悔い改めよ」という言葉。これは、捉え方によっては、私たちの罪の根を深くする言葉です。「悔い改める」の原文の言葉は、「メタノイア」「方向を変える」という意味の言葉です。神の方に向かう。いつも神の思いを尋ね、聴く、という生き方です。しかし、これを人の努力でなそうとする時に、私たちは容易に律法主義者となります。罪を告白し、神の方向を向いたぞ！悔い改めました、神様、と。ただ一方的な恵みにより赦された感謝よりも、悔い改めた達成感が私たちの心を満たす時に、それは次第に、「あの人は悔い改めていない、だめだ」「わたしは悔い改めが足りない、だめだ」と自分も他者も裁いていく可能性があります。人の努力で、神の願う悔い改めは起きないのです。神からの全く自由な、憐みによって、私たちは、悔い改めに導かれるのです。

鳩のように素直に。自然体で。主イエスは、自然体でした。「私は救い主だ」と、肩肘をはることはありませんでした。人にどう見られるかは、どうでもよいことでした。罪人と食事をする。人々から、揶揄されるのです。触ると汚れると思われていた、病の中にある人を友とし、手をとってくださいました。差別されていたサマリア人に対して、水をください、と自然に頼みました。弟子たちからも時には、「イエス様、それはちょっと」と言われます。でも彼は気にしません。それよりも、そこにある一つひとつの命との出会いを喜ばれました。自然体です。

「自然体」という言葉で、私が受けたアドバイスを思い出します。

神学生時代、私は「牧師になる人は、こうあらねばならない」という意識がありました。「人から尊敬される牧師」「神と隣人、教会を熱心に愛する人」。夏季研修中、訪れた教会の牧師が奉仕をする私に言うのです。「秋山さん、教会に仕えること。それはあなたが心からしたいことですか？それとも、それをしたら立派だと思えるからするのですか？」「あなたを見ていると、あなたも周りも疲れちゃうと思う」この言葉を受けて、私はハッとさせられました。こうあらねばならない、目標がある。そうして頑張る自分がある。でも、心から自然体で、主イエスの言葉を受け、そうしたいという気持ちがあるかどうか。それよりも、人の目を気にしていなかったらどうか。こういう牧師がいい牧師と決めつけていなかったらどうか。それはまた、人に対しても、この人はよいクリスチャン、この人は駄目クリスチャンという線引きをしていないだろうか。こう動いて欲しい、この人は動けない、ダメだと決めつけていく。そうした自分と他者の関係を見つめ直す問いをいただいたのです。

私は今、自分の子供たちの成長過程から学ぶのです。

長男も、次男も、幼いながら、できることが日々増えてきています。これをして、お父さん、お母さんが喜んでくれる。私たちも〇〇できたね、と喜ぶ。そして、彼らも褒められて嬉しくなる。できることが嬉しくなる。人の大事な成長の歩みです。でも、主イエスの生き方を私たちは知る時。聖霊の名によるバプテスマを授かる時、私たちはより自然体へと導かれます。それは、子ども達ができて喜ぶ、そしてできなくても「あなたそのものを」喜べる者とされていく。子ども達がたとえ、親を困惑させたり、悲しませることがあっても、子どもたちそのものを愛する者とされていく、ということです。それは、頑張って、努力して、認められようとしてきた親である以前に、まずこの自分を赦し、愛し、喜んでくださるイエス・キリストの思いの中で、生きるということなのです。天の父はそのように我が子イエスを見ており、そして、イエス・キリストを通して、私たち全ての人に、そのような愛と喜びの生き方を示しています。

・「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」

その天の父の声を主イエスはバプテスマの時聴きました。これは、主イエスと、聖霊と、そして神の名によるバプテスマを受ける時、私たちにも届けられている言葉です。「私の心に適う者」という言葉は、もっと端的に言うと「私の喜びです」となります。神の子が、人となられ、人に仕える者となった。低みに立ち続け、いのちの痛みを聴き、共に生きる者となった。そして鳩の霊を受け、全くの自由に、自然体で、人々と接し、出会われ、ここに生きていいんだ、大丈夫！と語ってくださる、その我が子を、父なる神は愛し、喜ぶのです。ここには、全く何か条件を求めています。立場とか、成功が大事なわけではありません。我が子をいつも、そのまま愛し、喜ぶ神がいるのです。

・「愛する」は「好き」ではない、「大切にすること」、愛することを学ぶこと

黒人と白人の間に立ち続け、差別と闘ったキング牧師という人がいます。彼は、聖書に書かれている「あなたの敵を愛しなさい」「隣人を自分のように愛しなさい」という主イエスの言葉について、「あなたの敵を好きになれ」「隣人を好きになれ」と言われていないことにホッとしている、と語りました。好きや嫌いは、感情であり、人のどうしようもできないことです。でもたとえ、どんなに嫌いな人でも、私たちは愛することはできる。それを学ぶことができる、と言うのです。

あるご婦人はこの話を聞いて、これまで家族の中でどうしてもうまくいかない、嫌われているだろうな、という人がいて、関係に困っていた。好かれようと頑張っている自分がいた。でも、主イエスは敵を好きになれ、と言われなくて、肩の荷がおりました、今度は、愛せるように祈りたいと思うと話してくださいました。こうしたことは程度の差はあれ、皆あることだと思います。

日本語の「愛する」が、どうも「好き」とか「嫌い」という範疇の言葉になってしまうことを問題視した、本田哲郎神父と言う人は、聖書の「愛する」と言う言葉を「大切にすること」と翻訳しました。嫌い、でも大切にすることはできる。そりがあわない、でも、大切にその人の言葉を覚えていくことはできる。心の内を理解するように、努めることはできる。主イエスは低みに立ち続けた。目の前の人の苦しみを、下から目線で理解しようとし続けた。これが愛するということじゃないか。日本語で、古くに訳された聖書にも、「愛する」とは「おでえじ」「大切にすること」と訳されています。

・「大切にすること」…その人がどうなっても、祈ること、態度を変えない自分がいるか、ということをお教えする言葉です。

「わたしの愛する子、私の喜び」と言われた神の声。これは、私たちの決めつけている「愛する」をはるかに越えるものです。条件付きではありません。これをしたから、愛するということではありません。「私は神を信じられない」「私は家族を、他者を、または自分そのものを愛せない」と自然体で発するその言葉をも知り、低みに立って受け止め、私たちと尚共にいてくださるのです。「死にたい」という言葉も、「生きづらい」という言葉も。そして「生きたい」という言葉をもです。私たち一人ひとりを大切に、覚え続けてくださるのです。一人ではないよ、ここで生きてよいよ、と励まし続けてくださるのです。

そして、この神の言葉は1回限りのものでもありません。バプテスマの時だけのもので終わるのではなく、将来にわたって、続くのです。イエス・キリストを通して、私たち一人ひとりにも同じように続く希望の約束なのです。

私は、牧師になった相模中央教会で、按手礼、つまり牧師として私が働きを全うできるように祈る、神からの働きを祝福して祈る、という教会の祈りを受けました。その按手礼に際して、教会全体での学び備える時がありました。そして按手礼の祈りを教会全体で作っている時に、もし秋山牧師が、牧師でなくなったら、その祈りは無効になるのか。そういう問いの声がありました。聖書を通して教会全体として導かれていった答えはこうでした。「秋山牧師が、相模中央教会の牧師でなくなっても、その祈りは有効です。秋山さんが、牧師という働きをたとえ放棄することがあったとしても、私たちは、神の祝福を祈り続け、秋山さんを愛します」。私がどんなになっても愛し、将来にわたって祈ってくれる人たちがいることに大きな驚きと共に、喜びと平安が与えられました。そして今尚どこにいても、この祈りを受けて、頑張ろうという情熱が、湧き起ってきます。牧師だから、クリスチャンだから、私たちは愛されるものではありません。なにかいいことをしたから、神様の喜びなのではありません。神様の愛は、喜びは、イエス・キリストを通して、私たち全てに無条件に与えられるものなのです。この教会を離れていった人たちや、イエスを信じることをやめたという人たちにもそれは変わらないものでしょう。また、既に天に帰って行った私たちの愛する人たち、愛せなかった人たちにおいても、神にとっては「愛する子であり、わたしの喜び」なのです。拒む権利が私たちにはありません。私たちに神からいただく愛に対するその大いなる愛を受けて（ローマ第8章、下記）、私たちは他者への愛、自分への愛にもまた新しく生きていけるのです。たとえ牧師をやめることがあったとしても、私は瑞穂教会の一人ひとりを愛し、大切に祈ります。イエスなど信じられないという日がきたとしても、私たちはいつも神様の方から、ずっとずっとこう呼びかけられています。「あなたは私の愛する子、わたしの喜びなのだ」。この御言葉から起こる驚きと感謝の歩みを、新しい1週も続けていきましょう。

—参考聖句—

ローマの信徒への手紙第8章 35節

「だれが、キリストの愛から私たちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。」

38節「わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高いところにいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」

